

IV まとめ

木古内2遺跡は、平成22年度に950㎡、平成23年度に330㎡の合計1,280㎡の調査を行った。調査の結果、遺構は縄文時代前期後半の竪穴住居跡6軒と、時期不明の割片集中1か所を検出した。遺物は縄文時代前期から後期の土器等11,036点、石器等8,287点が出土し、総遺物点数は19,323点である。平成22年度調査区(以後「台地部」)は標高約9mのほぼ平坦な台地部にあたり、平成23年度調査区(以後「低地部」)は、台地から続く急斜面と一段低い標高約4mの平坦部からなる。今回の調査は、年度ごとに調査範囲の地形、遺構・遺物の出土状況に違いがあるため、台地部と低地部の調査結果を比較しながら遺構・遺物についてまとめる。なお、平成22年度調査の詳細な内容は既刊の報告書(北埋調報278『木古内町 木古内2遺跡』)を参照頂きたい。

遺構は、斜面に接する台地部の縁辺に集中している。竪穴住居跡は全て円筒土器下層式の時期で、長径6mを越える大型のもの3軒(H-1・2・5)と長径3m前後の小型のもの3軒(H-3・4・6)が近接し、一部重複して構築されている。竪穴住居跡の新旧関係は、各遺構の遺物出土状況や重複関係から大きく2時期に分かれ、まず円筒土器下層c式の時期に小型の竪穴住居跡が作られ、次に円筒土器下層d1式の時期に小型の竪穴住居跡を一部壊して大型の竪穴住居跡が構築される。低地部では遺構は検出されていないが、遺物が低地部の急斜面中位から下位にかけて集散的に出土しており、範囲内からは円筒土器下層b式の復元個体が多く得られた。これらの遺物のまとまりは円筒土器下層b式の時期の大きな遺物集中として捉えることができ、その性格は遺物の捨て場と考えられる。前期以外の時期ではH-1覆土上層や遺構の周辺包含層から後期初頭の土器や礫が出土しており、明瞭な遺構ではないが、この時期に竪穴住居廃棄後のくぼみを利用した痕跡が認められる。

遺物の分布は、台地部では遺構及び遺構の分布する台地縁辺部から多く出土し、南西に向かって漸次減少する。低地部では上記の様に急斜面中位から下位にかけて多量に出土し、斜面から離れた場所では遺物が希薄となる。土器等は2か年の調査で、縄文時代前期～後期のものが11,036点出土した。調査区別の点数は台地部3,149点、低地部7,887点で、遺構のある台地部より低地部から多く出土している。

分類別では、Ⅱ群b類9,680点(約88%)とⅣ群a類1,210点(約11%)でほとんどを占め、ほかにⅢ群a類・Ⅲ群b類、Ⅳ群a類・Ⅳ群b類、土製品が少数出土している。台地部・低地部共に分類別の出土傾向はほぼ同じであるが、Ⅳ群a類土器の出土割合は低地部では出土土器全体の約2.4%であるのに対し、台地部では約32%と多い。また、焼成粘土塊や土製円盤などの土製品は台地部の遺構や包含層から出土し、低地部では出土していない。

Ⅱ群b類土器には、円筒土器下層b式・c式・d1式がある。円筒土器下層b式は主に低地部、円筒土器下層c式は台地部と低地部、円筒下層d1式は主に台地部から出土し、台地部と低地部では主体となる円筒土器下層式に時期差が認められる。円筒土器下層b式は、低地部出土のⅡ群b類のほとんどを占め、台地部では少量である。器形は平縁で口縁部がやや外反し、胴部がわずかにふくらむ。胴部から底部にかけてはゆるやかにすぼまり、底部は上げ底状になるものが多い。全体的に厚手で、胎土には繊維を多く含む。口縁から頸部に低い隆帯が設けられるもの多く、隆帯には指頭押捺・刻み・縄の側面圧痕が加えられる。口縁部文様帯に施される文様は太い原体による綾絡文が多く、綾絡文は隆帯の下部にも文様されるものがある。他には斜縄文・燃糸文・網目状燃糸文などがあり、さらに横位の沈線や縄側面圧痕が加えられるものも少数みられる。胴部の地文は斜位または縦位の正燃、反燃、合燃の縄文や縦位の燃糸文が施され、綾絡文が胴部中位に施されるものもある。また、底面に文様が施されるものが

多い。内面調整はナデが多いが、部分的にミガキが施されるものもある。円筒土器下層c式は台地部と低地部から少量出土している。口縁部がやや外反し、胴部はほとんどふくらまない。器壁はb式に比べて薄くなる。口縁部は緩やかな波状を呈するものもある。口縁部文様帯には結束羽状縄文・斜縄文・綾絡文・捺糸文・縄側面疳痕などが施される。胴部には縦位の捺糸文が施される。内面調整はミガキが一般的で、胎土には繊維を含むが、円筒土器下層b式よりは少ない。円筒土器下層d1式は台地部の遺構・包含層から多く出土し、低地部では斜面上位から少量出土している。器形は胴部が直線的な円筒形で、口縁部はほぼ直立する。器壁は薄手のものが多い。文様は口縁に縄側面疳痕が3・4本、胴部に縦位の捺糸文と間隔の均等な横位の羽状縄文または綾絡文で構成される、いわゆる「すだれ状縄文」をなすものがほとんどである。内面調整は丁寧なミガキが施される。また、胎土に含まれる繊維は少量である。

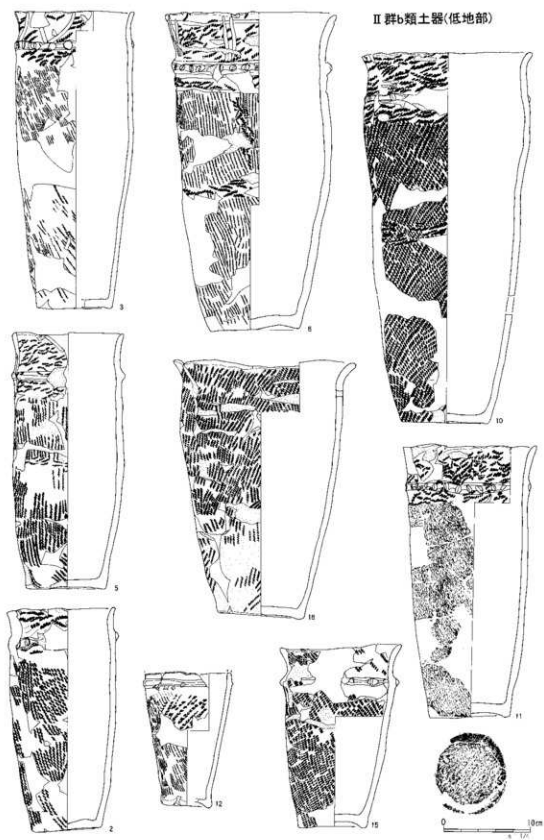
IV群a類土器は、台地部では天祐寺式など後期初頭の土器、低地部では涌元式もしくはトリサキ式、大津式などの天祐寺式に後続する土器が出土しており、台地部と低地部では時期差が認められる。遺物の分布状況は、台地部ではほぼII群b類土器の分布と重なり、主に遺構周辺から出土している。低地部では斜面の上～中位にかけて出土する傾向がみられ、II群b類の分布とはややずれる。また、泥炭層から涌元式もしくはトリサキ式と考えられる壺形土器1個体がほぼ完形で出土している。

石器等は、2か年の調査で剥片石器・礫石器・礫などが8,287点出土した。定型的な剥片石器の点数は、スクレイパーが95点と最も多く、以下つまみ付きナイフ25点、石鏃13点、両面調整石器12点、石槍・ナイフ類9点、石錐5点の順となる。礫石器は扁平打製石器が68点と最も多く、たたき石21点が次ぐ。石鋸、砥石、石皿・台石、石錘などは10点以下の出土でごく少量である。

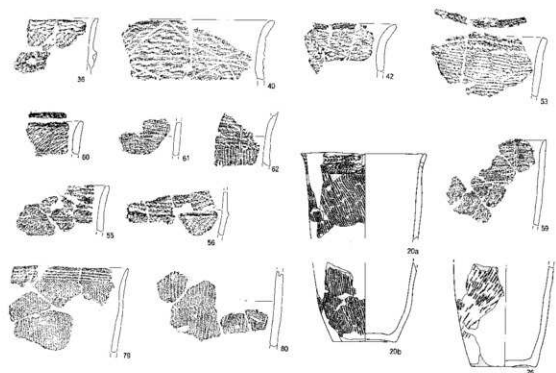
遺跡の内容を時期ごとに整理すると、最も古い段階では、円筒土器下層b式の時期に低地部の斜面に遺物が廃棄され、次に台地部で円筒土器下層c式期に小型の堅穴住居が作られ、さらに円筒下層d1式期には大型の堅穴住居が小型の堅穴住居を一部壊しながら作られている。その後、後期前葉には堅穴住居跡のくぼみを利用するなど小規模な活動が行われている。遺跡の性格は、縄文時代前期では、円筒土器下層b式の時期には遺物の捨て場、円筒土器下層c～d1式期においては継続して営まれた集落跡と考えられる。調査区内の遺構・遺物の分布から、台地部の堅穴住居跡群や低地部斜面の遺物集中は台地の縁辺に沿って、調査区外の西側に広がる可能性が高い。また、低地部の円筒土器下層b式の遺物集中と同時期の遺構は、今回の調査では検出していないが、調査区外に堅穴住居跡などの遺構が存在する可能性がある。集落跡の広がりが始まりの時期は今回の調査範囲だけでは推定の域を出ない部分が多く、これらは今後の調査を待ちさらに検討する必要がある。また、木古内2遺跡周辺には、円筒土器下層式の時期の遺跡として、木古内町木古内遺跡、大平遺跡、大平4遺跡、蛇内遺跡、釜谷遺跡、釜谷5遺跡など数多くみられ、これらの遺跡との比較を行い、本遺跡の性格を考えていくことも重要であろう。(広田)

表Ⅳ-1 年度別遺物点数一覧

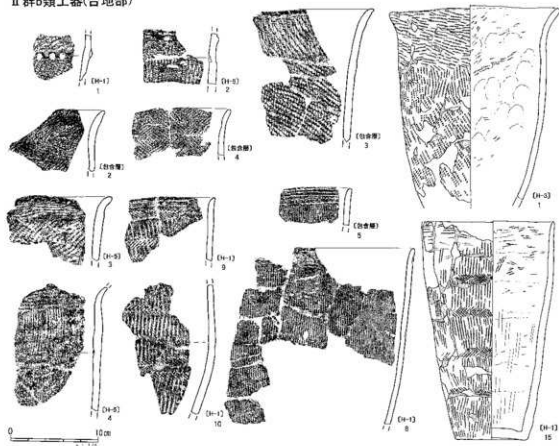
分類 年度	土 器						石 器														総計										
	IIb	IIIa	IIIb	IVa	IVb	土製円筒 焼成粘土 土製円筒	土器等 計	石 錐	石 槍・ ナイフ 類	つまみ 付き ナイフ	両面 調整 石器	石 鏃	二次 加工 のある 剥片	剥 片	石 斧	た た き 石	す り 石	扁平 打製 石器	北 海 道 式 石 冠	石 皿		砥 石	石 錘	石 錐	加工 済 のある 礫	石 製 品	礫・ 礫片	不 明	石 器 等 計		
遺跡(2010)	1,698	3	626	1,110		2,438	6	3	1	9	41	1	9	22	23	4,642	2	9	6	46	1	6						2,666	1	5,496	7,934
2010年度	304	1	389	14	2	711	3	4		4	18	1	2	21	9	506	4	5	2	4							62		645	1,356	
2011年度	7,678	14	195			7,887	4	2	4	12	36	10	10	66	23	513	10	7	1	20	0	2	1	2	11	142	2	2,146	10,033		
2年分合計	9,680	18	1,121	1,124	2	11,036	13	9	5	25	95	12	21	109	55	5,661	16	21	7	68	1	10	2	1	2	11	2,246	1	8,287	19,323	



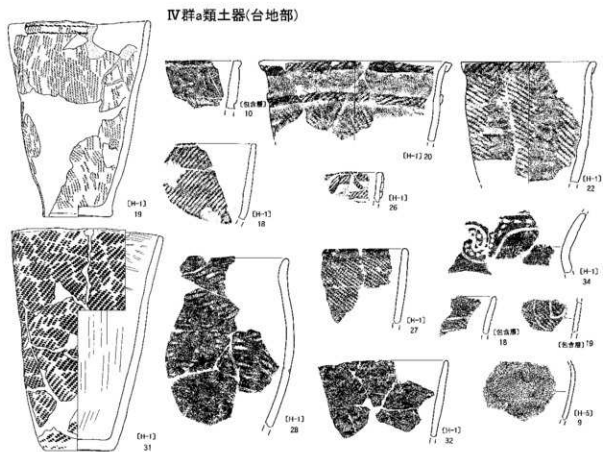
図IV-1 II群b類出土土器集成(1)



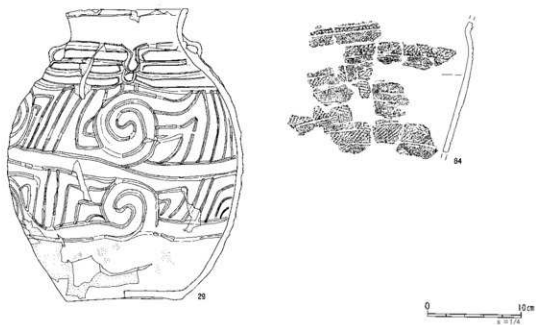
Ⅱ群b類土器(台地部)



图Ⅳ-2 Ⅱ群b類出土土器集成(2)



IV群a類土器(低地部)



図IV-3 IV群a類出土土器集成

引用・参考文献

木古内町公式ホームページ、木古内町観光協会ホームページ、歴史浪漫・街道物語ホームページ(歴史浪漫・街道物語連絡協議会)

木古内町教育委員会

- | | |
|-------------------------------|--------------------|
| 1974 『札苜遺跡』 | 1998 『亀川3遺跡』 |
| 1989 『鶴岡2遺跡Ⅰ』 | 1998 『泉沢3遺跡』 |
| 1990 『鶴岡2遺跡Ⅱ』 | 1999 『釜谷遺跡』 |
| 1991 『釜谷4遺跡』 | 1999 『新道2遺跡』 |
| 1992 『釜谷遺跡 概報』 | 2001 『蛇内遺跡』 |
| 1993 『釜谷遺跡 概報』 | 2002 『大釜谷3遺跡 概報』 |
| 1995 『釜谷遺跡 概報』 | 2003 『大釜谷3遺跡』 |
| 1995 『釜谷5遺跡』 | 2003 『泉沢2遺跡 (B地点)』 |
| 1996 『釜谷遺跡 概報』 | 2003 『泉沢2遺跡 A地点』 |
| 1996 『亀川2遺跡・亀川3遺跡 概報』 | 2003 『新道2遺跡Ⅱ北地点』 |
| 1997 『亀川2遺跡Ⅱ・亀川3遺跡Ⅱ・泉沢3遺跡 概報』 | 2004 『泉沢2遺跡 C地点』 |
| 1997 『新道3遺跡』 | 2004 『蛇内遺跡』 |
| 1998 『亀川2遺跡』 | |

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

- 2009 『調査年報22』
2010 『調査年報23』
2011 『調査年報24』
- 1985 『木古内町 建川1・新道4遺跡』 北埋調報33
1985 『木古内町 札苜遺跡』 北埋調報34
1986 『木古内町 建川2・新道4遺跡』 北埋調報43
1987 『木古内町 新道4遺跡』 北埋調報52
2010 『木古内町 木古内2遺跡』 北埋調報278
2010 『木古内町 大平遺跡・大平4遺跡』 北埋調報280
2011 『木古内町 蛇内2遺跡』 北埋調報281

1982 『木古内町史』 木古内町

- 1995 南北海道考古学情報交換会 『円筒土器下層式図録集』 第16回南北海道考古学情報交換会資料集
1997 日本ベトロジー学会編 『土壌調査ハンドブック 改訂版』 博友社
2003 大森司統 「渡島半島の縄文時代後期前葉」 『第1回 東北・北海道の十勝内I式再検討』 海峡土器編年研究会
2004 小山正忠・竹原秀雄 『新版標準土色帖』 日本色研事業株式会社
2008 茅野嘉雄 「円筒下層式土器」 『総覧縄文土器』 小林達雄編 アム・プロモーション